

はじめに

現行全道研究統一主題「自信がつく体育学習の充実」では、これまでの北海道の体育研究の成果を授業にて表現し、身に付けさせたい確かな体育の力を明確にして、どの子にも確実に獲得させていくことができる指導と評価について提案してきました。

指導要領のもとで学校体育に求められていることと、受け継いできた北海道の体育研究の成果を改めて見直し、子どもたちの健やかな未来を担うためにも新しい研究構想を説明すると共に、新主題を提案していきます。

【主 題】 つなぐ体育 ひらく未来

【副主題】 見方・考え方を豊かに働かせ、自己実現する体育活動

主題の概要

積年の研究集積や人と人のつながりを十分活用する手だてを講じることで、
(つなぐ…手段)

北海道らしい新たなスポーツライフが生まれたり、変化に対応できる学校体育の
基盤が作られたり、距離を超えて豊かにコミュニケーションが図られたりし、
(ひらく…生まれる姿・新たな価値創造)

その営みを経て児童生徒の活力ある生活が構築されたり、児童・生徒の自己実
現が成し遂げられたり、共生を意識した地域社会が営まれたりする。
(未来…自己実現)

北海道らしい体育	<p>本質的な魅力を味わえる体育活動</p> <p>体力・運動能力や運動習慣等の把握 体力向上や二極化への対応</p> <p>感染予防に配慮した体育学習</p> <p>ICTを活用した個別最適な学び 保健学習の研究推進</p> <p>感染予防に配慮した組織運営 研究の集積と支部研究体制</p>	つなぐ 体育 ひらく 未来
北海道の現状	<p>多様な自然環境</p> <p>「体育が好き」だが「運動しない」児童・生徒</p>	
学校体育の基盤	<p>豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成</p> <p>課題解決の学習の実現 豊かな見方・考え方との関連を深める</p>	

学校体育の役割

児童・生徒が生涯にわたって心身の健康を保持増進し、自己実現の為に前進していくことは学校教育の願いです。そしてその一翼を担う学校体育は、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目標としています。

一方でコロナ禍においては、体育活動は変化を求められ、それは活動制限となり現れています。その結果懸念されるのは、更なる体力低下と運動習慣の二極化です。

この変化に対応し、新しい学びを創出していくためには、改めて体育・健康に関する指導を十分に味わわせていくことが大切です。

北海道の強みと弱み

北海道の強みは、多様な自然環境が身近にあることであり、多様な教育環境が各地にあることです。一方で児童・生徒の体力低下傾向と短い運動実施時間は長年の課題です。

各種目の平均値と体力合計点の経年変化

●男子

	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (点)	20mシャトルラン (回)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ソフトボール投げ (m)	体力合計点 (点)
令和元年度	16.37	19.80	33.24	41.74	50.32	9.42	151.47	21.60	53.61
平成30年度	16.54	19.94	33.31	42.10	52.15	9.37	152.26	22.14	54.21
平成29年度	16.51	19.92	33.16	41.95	52.23	9.37	151.73	22.52	54.16
平成28年度	16.47	19.67	32.88	41.97	51.88	9.38	151.42	22.41	53.93
平成27年度	16.45	19.58	33.05	41.60	51.64	9.37	151.27	22.51	53.81
平成26年度	16.55	19.56	32.87	41.61	51.67	9.38	151.71	22.89	53.91
平成25年度	16.64	19.54	32.73	41.42	51.40	9.38	152.09	23.18	53.87
平成24年度	16.71	19.44	32.59	41.59	51.60	9.36	152.36	23.77	54.07
平成22年度	16.91	19.28	32.58	41.47	51.28	9.38	153.45	25.23	54.36
平成21年度	16.96	19.28	32.55	40.81	50.06	9.37	153.66	25.41	54.19
平成20年度	17.01	19.12	32.68	40.99	49.39	9.39	153.96	25.39	54.19

●女子

	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (点)	20mシャトルラン (回)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ソフトボール投げ (m)	体力合計点 (点)
令和元年度	16.09	18.95	37.62	40.14	40.80	9.63	145.70	13.59	55.59
平成30年度	16.14	18.96	37.63	40.32	41.89	9.60	145.97	13.76	55.90
平成29年度	16.12	18.80	37.44	40.06	41.62	9.60	145.49	13.93	55.72
平成28年度	16.13	18.60	37.22	40.06	41.29	9.61	145.34	13.87	55.54
平成27年度	16.05	18.41	37.45	39.56	40.70	9.62	144.80	13.76	55.19
平成26年度	16.09	18.26	37.22	39.37	40.30	9.63	144.79	13.89	55.01
平成25年度	16.14	18.06	36.89	39.07	39.67	9.64	144.59	13.92	54.71
平成24年度	16.23	17.09	36.70	39.24	39.95	9.63	144.94	14.21	54.87
平成22年度	16.37	17.75	36.79	39.18	39.68	9.65	145.28	14.55	54.91
平成21年度	16.34	17.65	36.64	38.48	38.74	9.64	145.14	14.61	54.60
平成20年度	16.45	17.63	36.64	38.77	38.72	9.64	145.77	14.85	54.85

※最高値はピンク、最低値はブルーで顕微鏡している。
※50m走は、種が小さいほど記録がすぐれている。

令和元年運動能力調査小学児童の分析結果から

また、人口減少による教育への弊害は今後日本全体の問題となりそうです。体力・運動能力、運動習慣等の状況把握、ICTを活用した個別最適な学び等、先進的な取組は大きな価値となります。

脈々と続く研究の集積と、支部で進める研究体制も大きな強みといえます。一方、各支部の成果を束ね還元していくという営みが遠隔と感染症という壁に阻まれています。

学校体育の役割

学習指導要領の求めへの対応は前提です。指導要領解説には、「習得した知識や技能を活用して課題解決したり、学習したことを相手に分かりやすく伝えたりすること」等、成果と課題が示されています。

成果

- ・運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと。
- ・体力の低下傾向に歯止めがかかったこと。

- ・「する、みる、支える」のスポーツとの多様な関わりの必要性や公正、責任、健康・安全の内容が身についていること。

課題

- ・課題解決に関わって習得した知識や技能を活用して課題を解決したり、学習したことを相手に分かりやすく伝えたりすること。
- ・運動する子とそうでない子の二極化傾向がまだ見られること。
- ・体力水準は依然として低い状態が見られること。

また、体育において強調されている「見方・考え方」について対応も必要です。体を動かす楽しさや、できる喜びを味わうために「する・みる・支える・知る」と関連する手立てを教材と子どもを結び付ける多様な接点として設けなくてはなりません。

課題解決の学習を通して子どもの資質・能力を育てていくことは学校体育の責任です。

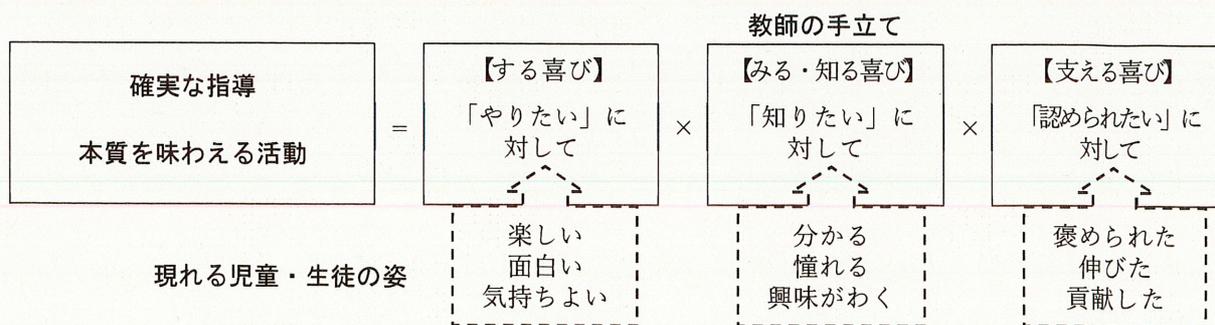
主題を実現するために

主題を実現するために、副主題「見方・考え方を豊かに働かせ、自己実現する体育活動」を目指す授業像として設定しました。

現行主題「自信がつく体育学習の充実」では、どの子どもやってみたい・できそうと期待感と自信をもって取り組める教材を開発し、教師は運動・スポーツの価値や特性を捉え、児童・生徒が確かな力を獲得できるように手だてを講じてきました。それを継承すると共に、教材と手だてを見方・考え方でつなぎたいと考えています。つまり、より多様に児童・生徒に対応していく体育の学びを、「体育の見方・考え方を豊かに働かせる学習過程の工夫」によって実現していくのです。

このような体育活動の中の「する・みる・支える・知る」に関連する手だてを、教材と子どもを結び付ける多様な接点として工夫することで、運動・スポーツの楽しさや喜び、つまり本質を十分に味わわせていきたいと考えています。この工夫は学級集団に存在する様々な違い、すなわち「多様性」を欠点としない意識の高まりと考えています。それは、「多様性」を資質・能力の高まりを促進する源泉として、積極的に活用するための意識変革ともいえます。

これを図に表すとこのようになります。資質・能力を育む確実な指導、そして本質を味わう活動は、【する喜び】と【みる・知る喜び】と【支える喜び】という見方・考え方を満たす手だての積りでできているという式です。



同時に、積はどこかに0があると答えも0になることから、どれもおろそかにしないという主張でもあります。そして、それは子どもの「やりたい」「知りたい」「認められたい」という3つの意欲を満たす手立てです。特に体育学習の中核であり、北海道学校体育連盟が大事にしてきた「する喜び」、つまり子どもが「やりたい」と思う気持ちには、今まで同様しっかりと応えていきたいと考えています。また前に述べましたが、豊かなスポーツライフの土台となる、保健学習の指導や、大きく注目されている1人1台端末で行われるICTを活用した個別最適な学びについても各支部で大きく力を注いでほしいと考えています。

一方で、保健学習への対応には課題があります。

「保健の見方・考え方」については、疾病や傷害を防止するとともに、生活の質や生きがいを重視した健康に関する観点を踏まえ「個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること。」と整理されています。

副主題「見方・考え方を豊かに働かせ、自己実現する体育活動」を目指す授業像として設定しましたがこれをベースに保健学習に対しても授業実践と分析を進め、保健の見方・考え方にも対応した研究理論を構築していくことが大きな課題です。

また、コロナ禍における児童・生徒の体力や運動生活習慣についての分析も急がれます。体力・運動能力、運動習慣調査をベースとして、北海道の子どもたちの状況を把握していくことが大きな課題です。どちらについても、各支部の組織力を生かし研究を進め、それを束ねることで対応していきたいと考えています。

主題と副主題の実現のために

主題と副主題の実現のための取組は3つあります。

1つ目は、研究です。全道大会を節目として、全道で研究授業を重ね、研究を深めていくことです。

2つめは 研究理論との関連を深め、指導案等の指導計画を作成することです。

3つ目は、授業場面における教師と児童・生徒の姿に対する評価方法を築くことです。

1つめの全道大会を節目として、全道で研究授業を重ね、研究を深めていくとは、今まで同様、全道大会までに、各支部が研究授業を重ね、それを交流し、研究を深めていくということです。そして成果を支部に持ち帰り、さらなる深まりを求めるというサイクルを作るということです。

2つめの、研究理論との関連を深め、指導案等の指導計画を作成することとは、「する・みる・支える・知る」と関連する手立てを、教材と子どもを結び付ける多様な接点として工夫し、「指導の計画を立て、手立てを講じる」ということです。それは、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」に対する3つの視点から手立てが講じられているかどうかチェックする作業でもあります。

3つ目の授業場面における教師と児童・生徒の姿に対する評価方法とは、授業評価シートです。授業場面における児童・生徒の姿の評価です。その項目が、どの程度児童・生徒にあてはまるかを参観者が評価します。そしてそれを授業後の話し合いで生かせるような方法を提案していきます。